

集う

学生諸君も含めて、私たちが「集う」場所の一つが研究室である。研究室の安全衛生管理の状況をみるために、7月から延べ13回の研究科長パトロールを行い全研究室を廻った。廻ってみて当研究科は研究室の「集合体」であることを改めて実感した。研究室は別の言い方では町工場と言えるかもしれない。研究室の安全衛生管理の状況は、社長に相当する教授の性格と研究費の状況によって大凡決まるということも分かった。しかし研究科は研究室の単なる「集合体」ではない。研究室は教育研究上の特定の使命を持った組織として専攻や附属施設を形成している。

東京大学は特定の使命を持った多くの研究科・学部や研究所等の集合体である。これらは縦割り組織といえるが、法人化以降、部局横断型の研究機構やネットワークが総長室に続々とつくられている。当研究科では10年前から超専攻として農学国際専攻を設置し、その後生圏システム学専攻を立ち上げた。また法人化以降は専攻に跨って25ほどの研究グループをつくり、さらにアグリバイオインフォマティクスやアグリコクーンという研究科共通科目を設定した専攻横断型教育ユニットを立ち上げた。これらは農学として取り組むべき重要な使命を産学のみならず官民も加えた幅広い連携を軸として遂行することを目指している。

こうしてみると従来の縦割り組織の欠点を新たに横割り組織をつくることで克服しようとしていることがわかる。新たな「集い方」が指向される時代になった。しかし個人力がない人々の「集い方」をいくら模索しても、それは烏合の衆といわれるであろう。基盤になるのは個人力である。



秩父演習林への外国人留学生見学旅行にてオレンジ色のコートを着て、後列でVサインをしているのが會田先生

大学院農学生命科学研究科長・農学部長
あいだ かつみ
會田 勝美

AGRI-COCOON program

アグリコクーン

農学知のネットワーク

わたしたち農学生命科学研究科は2005年度に学際的かつ専攻横断的な産学官民連携型の大学院教育システム〔アグリコクーン〕を創設しました。食料・環境・開発問題、生命・情報技術などをテーマに、ラボからフィールド、自然科学から社会科学までカバーする農学ならではの総合的なカリキュラムが組まれています。2006年度は、修士1年の約半数の学生がどれかの授業に参加しました。



農業・資源経済学専攻／アグリコクーン事務局
なかしま やすひろ

中嶋 康博 助教授



大学院で学ぶ醍醐味は最先端の学問の成果を知り、知の生まれる現場に立ち会えることです。大事なのは、単なる知識の詰め込みではなく、新しい学問を生み出すための発想力や構想力を磨くこと。現代の研究は高度に専門化する一方で異分野の成果や手段を次々と分析手法に取り入れるようになっていきますので、自分の専門分野以外のことにも敏感になる必要があります。

新しい教育プログラムは、学外の企業・行政、民間団体の方々に、演習での講義や実習の実施など、直接、間接さまざまな形でご協力をいただいています。多くの実習はキャンパスを飛び出して行われました。霞ヶ浦湖畔での自然再生モニタリング、秩父演習林を利用したバイオマス利用実習、企業や分析機関での食品安全管理に関する実地研修、そして農村開発やフードシステムに関するタイ・インド

ネシアでの実地調査です。

わたしたちの研究科には多様で多彩な人々が集っていて知的刺激に満ちています。でも、知らない研究室のドアをノックするには勇気がいるものです。学際的な教育・研究交流ができるように大学院生皆さんのアカデミックな社会的ネットワークを築くことが、アグリコクーンの大事なミッションです。さらに授業の枠を越えて「農学友人の和」という見学ツアーを2回企画しました(アサヒビール、サントネージュワイン工場視察)。留学生の皆さんも含め、学生と教職員のべ97名が参加しました。

農学は、長い伝統と歴史の積み重ねの中で、有形無形の「知の糸」を紡いできました。アグリコクーンは、専攻や研究室を互いに結び、この知の糸を農学知のネットワークというタペストリーに織り上げるためのプラットフォームの提供をめざします。



▶ 教えて! Q&A

アグリコクーン

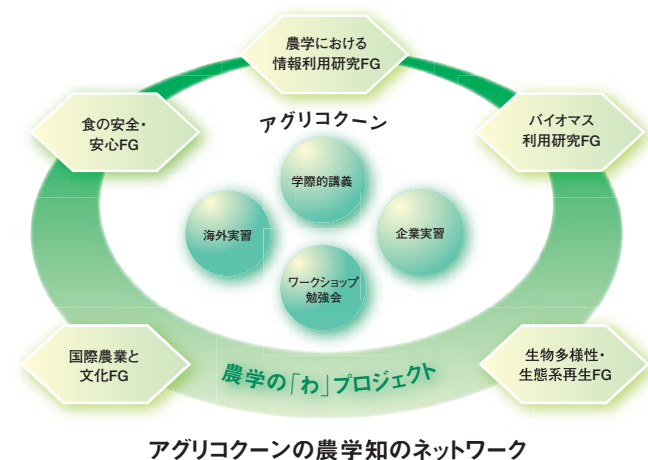
2005年度日本学術振興会「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の採択を受けて、本研究科に産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構(通称アグリコクーン)が発足しました。この名前は、この機構の英語名、**AG**ricultural **R**esearch **I**ncubator・**CO**munity for **CO**operative **N**etwork of Administrative, Business, Public and Academic Sectorsの頭文字からきています。5つのフォーラムグループから構成され、62名の教員が学際的な講義・演習・実習(研究科共通科目)を行い、様々なワークショップ、勉強会も実施しています。またBAG(ビジネス・アラムニ・アドバイザリーグループ)として7企業・機関の方々にサポーターになっていただいております。

フォーラムグループ

「食の安全・安心」、「バイオマス利用」、「国際農業と文化」、「生物多様性」、「情報利用」をテーマに、5つのフォーラムグループ(FG)が、食料、農業、環境、農村に関するさまざまな問題について専攻を超えて学際的に教育、研究、情報発信、連携交流を進めています。フォーラムグループはそれぞれ独立に活動していますが、アグリコクーンはこれらの活動を教務、広報の面から日常的に支援して、フォーラムグループ相互を有機的に結びつけています。

社会的ネットワーク

人と人との協力関係があって社会活動は円滑に進みます。家族やコミュニティ(地域共同体)はもちろん、あらゆる人々のつながりは今、社会的ネットワークとして再解釈されています。このことをITビジネスに応用した「ソーシャルネットワークングサービス」も現れています。アカデミックな世界は昔から人の結び付きで成り立っているのです。大学の中にも研究室のタテのネットワーク、同期生のヨコのネットワークがあることに気づくでしょう。アグリコクーンは研究室、学年、そして大学の壁を取り除き、縦横無尽に社会的ネットワークを張り巡らしたいと考えています。



アグリコクーンの農学知のネットワーク

